

源氏物語

源氏物語は、いうまでもなく日本古典の最高峰に位置する紫式部作の物語であり、平安中期成立の五十四巻からなる大部な作品である。今回は、本学所蔵の資料のなから、古活字版、版本、写本と、それぞれ形態の違うものを展示し、その差異を比較していただきたい。

(1) 源氏物語

元和活字版

(黒川文庫)

古活字版五十三冊(蓬生の巻欠) 美濃判 十行書き十九字詰 無刊記 初巻から六巻

まで黒川真頼書入・朱点

この古活字版とは、明治以前の活字印刷の中でも、古い時代、つまり慶長・元和期を中心として、文禄から寛永年間にわたる初期に出版された版本をさす総称で、一個一字から三字程度の活字(当時は木活字が大半)を組版にしたもので、整版とは異った印刷であった。

本学の古活字版は、川瀬一馬著「古活字版の研究」にも紹介されたもので、版式が古いうえ、欠本が極めて少なく、本学所蔵の貴重書のなかでも屈指の一本である。

(2) 源氏物語

入

(黒川文庫)

版本三十四冊(六〇冊本の内一、三十三、系図) 美濃判 無刊記 絵入 黒川真頼書

黒川真頼(一八二九～一九〇六)は、江戸後期から明治期に活躍した国学者で、黒川春村について国学をび、本学所蔵の黒川文庫は、この真頼を中心とした黒川家の旧蔵書である。

(3) 源氏物語

(黒川文庫)

版本四十六冊(二、三、三十二、三十四、三十六、四十七、五十一欠)(一、四、

五十三、五十四影写本) 美濃判 十一行書き 無刊記 加藤千蔭書入
加藤千蔭(一七三五～一八〇八)は、本姓橘千蔭と称し、江戸中期の歌人、国学者、能書家として有名であり、賀茂真淵の門人として、村田春海と共に、古今、新古今風の歌を詠じて、江戸派と呼ばれた。

この(2)、(3)の版本は、整版である。木活字版であると、活字が逆さになったり、不鮮明であったりすることが多あり、また出版が盛んになるにつれ、振り仮名や絵入の要求も次第にでてくる。整版は、一枚板の版木に版下を彫刻するもので、このことにより、活字版の不便な点が解決されることになるのである。古活字版以前にも、この整版が寺院出版など細細とした形で印刷されていたのであるが、今度は民間的に盛大な形で復活したのである。

(4) 源氏物語

(常磐松文庫)

写本五十四冊 美濃判 十行書き 奥書・内題なし 萩原広道朱注
萩原広道(一八一三～一八六三)は、江戸後期の国学者で、通称鹿左衛門、国学を大
国隆正に学ぶ、「源氏物語評釈」の著書があり、「源氏物語」の文章批評は広道から始
まるといわれている。